第 15 回 Asia Traveling Fellowship　紀行記　ベトナム・インドネシア
公立昭和病院　藤井賢吾　札幌医科大学　黄金勲矢

【ベトナム（2023 年 7 月 15 日～7 月 22 日）】

7/15-16 Ho Chi Minh City(HCMC)
7/16-19 Can Tho Central General Hospital, Can Tho
7-19-22 Khan Hoa General Hospital, Nha Trang
7/22 HCMC

ホストの Professor Võ Văn Thành と現 Sai Gon Spine Society President の Dr. Hồ Nhựt Tâm がおられる HCMC からの小旅行 x2 で、前半は陸路約 4 時間メコンデルタの街カントー、後半は国内線飛行機で約 12 時間のビーチリゾートの街ニャチャン、2 箇所での研修を経て最終日に HCMC に戻る、という旅程でした。

Can Tho General Hospital は 1200 床、整形手術 7000 例/年の大病院です。陸路でしか行けないため、なかなか機会がないと思いますが、水上マーケットが有名だそうです（雨で行けず）。2024 年に開院予定の Trauma+Ortho 新病院長に就任予定の Dr. Em がトップで、Dr. Thuyet は UBE, ACL, THA など幅広い手術をこなすそうです。Dr. Duy には体調不良の手当をしていただきました。一例ずつ、私は頚椎後方除圧固定術を執刀させてもらうことになり、貴重な経験をさせていただきました。

Khan Hoa General Hopital は 1100 床、整形手術症例 4500 例/年の病院で、3 年後に 3 倍規模の新病院計画があるそうです。トップは Dr. Manh で、Dr. Van が 2 番手です。頚椎 TB に対する ACCF, PLIF, C5/6 OPLL に対する ACCF の助手をさせていただきました。北部の都市ハイフォンから見学の脳神経外科の先生方も交えた屋外レストランでの宴会は大変盛り上がりました。

Prof. Võ Văn Thành からは、ご自宅やご実家にもご案内いただき、TB spine に対する治療経験の話や、透視を使わずに椎弓根スクリューを挿入する独自の手法などの紹介だけでなく、国際交流を経てお互いの文化やマナーの違いを知ることの重要性、彼の脊椎外科医としての歩みや人生観について、特に貧しい人たちに医療を届けるという強い信念をもって診療をされていること、など大変深いお話を聞かせていただきました。

我々二人はエスニック料理が大好きということもあり、野菜・フルーツ・魚料理などから、次第に勧められるがままに刺身や生ウニ・貝類やタコの踊り茹でなどのご馳走をいただきましたが、結果二人とも途中で体調を一度ずつ崩しました。

ベトナムは近年経済の発展がめざましく、都市部では国産車 VinFast が走りビルが立ち並び、カントー、ニャチャンでも現在進行形の大開発を多く目にし、また HCMC、ニャチャンは外国人で賑わう町でした。一方で、路地裏や地方農村部では環境の悪い状況が残る状況もありました。

【インドネシア（2023 年 10 月 8 日～10 月 14 日）】

インドネシア第 2 の都市スラバヤはジャワ島の東部に位置する港町です。ホストは Department of Orthopaedic and Traumatorogic department, Airlangga Unieverisity の Professor Bambang Prijambodo で、大学病院である RSUD Dr. Soetomo Hospital を訪問しました。

空港には Prof. Bambang の跡を継いで脊椎部門トップの Dr. Primadenny が迎えに来てくださりました。インドネシアでは姓を持たない民族が大多数であり、しばらく気づきませんでしたが Prof. Bambang の息子です。翌朝の送迎、研修医達との会食、整形外科全体のディナー、最終日には奥様・医学部在籍中の娘さん・５歳の息子さんとのディナーまでおもてなしをいただき、大変お世話になりました。実は、経由地からの現地到着便が航空会社の都合で別便に急遽変更になり、到着時刻が予定より数 10 分遅れたため出会えないというピンチが発生しました。事前に先方との緊急時連絡先を把握すべきでした。今後のフェローの方々の参考になればと思います。

大学病院の脊椎外科医は Dr. Primadenny の他に Dr. Komang, Dr. Lukas, Dr. Aries の 4 名で、 Grand round では交通事故後の重度四肢外傷患者などが蒸し暑い病棟で多く治療されているのを目の当たりにしました。東ジャワで一番大きな公立病院なので難症例が集まってくること、公的保険では制約が多く安いインプラントしか使えないこと、ベッド数の問題で本来緊急性のある脊椎外傷であっても急性期を乗り越え手術にたどり着いた症例を待期的に手術せざるを得ないこと、などを聞きました。

Prof. Bambang からの月曜日朝定例のレジデント講義では、TB が多いこと、膿瘍の大きさ・罹患椎体数・血沈で独自の重症度分類し治療方針を決めているという講義内容でした。脊椎インプラントを使えなかった時代に四肢骨用のプレートを使った画像もありました。水曜日には T12 TB に対する Prof. Bambang 執刀の電気メスを一切使わない前方手術も見学しました。Private hospital、骨董品のコレクションが飾られたご自宅にもご案内いただきました。被爆に注意すること、家族と趣味を大切にすること、ストレスをうまく発散しながら、手術だけでなく人生を楽しみなさい！というメッセージは強く私の心に残りました。

インドネシア料理も大変美味でした。地域によって味付けが違うことを教わり、印象に残ったのはカリマンタン島風スープ（ソトカリマンタン）、ナマズ料理、スラバヤ名物の黒いスープ（ラウォン）、そしてなんといってもマドゥロ島風スープ（ソトマドゥロ）でしょうか。脳や肺、腸などの臓物を一緒に煮込んであり、歴代フェローでは大変美味という方もいれば調子を崩された方もいたようです。サンバルという辛く酸味のある調味料を加えて食べるのが現地流ですが、我々はアドバイスに従い舐めるだけにしました。種々の風味が混ざり合った豚骨スープのような味で、おじや風にしてとても美味しかったです。

【終わりに】
本研修は 3 年越しでの実現となりました。フェローシップでなければ経験できないことばかりで、渡航先では毎日目の前でぱっと自分の世界が広がるような、不思議で大変貴重な体験をさせていただきました。両国ともに期間中に全く持て余す暇のない非常に手厚い歓待で感激しました。関係者皆様および快く送り出してくれた職場の同僚、そして同い年のバディ黄

金先生に改めて感謝申し上げます。我々はバイクの群れが止まらない中で道路を難なく横断する技能を身につけて無事帰国いたしました。
両国で会った先生方はほぼ全員が日本で学ばれたことがある親日家で、彼らをホストした日本の皆様と彼らとの関係性、その結果維持されている本研修がいかに貴重なものであるかを実感いたしました。両ホストはご高齢ですがまだまだ我々にエネルギーを与えてくださる存在でした。また、両国で我々をずっと案内してくれた若手の先生（Dr. Quân , Dr. Simatupang）とは 1 番多く会話をし、印象に残りました。この素晴らしい交流を引き継いでいけるよう私達も貢献していければと思います。

写真１
ベトナム・ニャチャンにて。後列左から 2 番目黄金先生、3 番目 Dr. Manh、4 番目藤井

写真 2
インドネシアでの集合写真。前列左から Dr. Primadenny, 藤井、Dr. Koman、Prof. Bambang、黄金先生、Dr. Lukas、Dr. Aries。